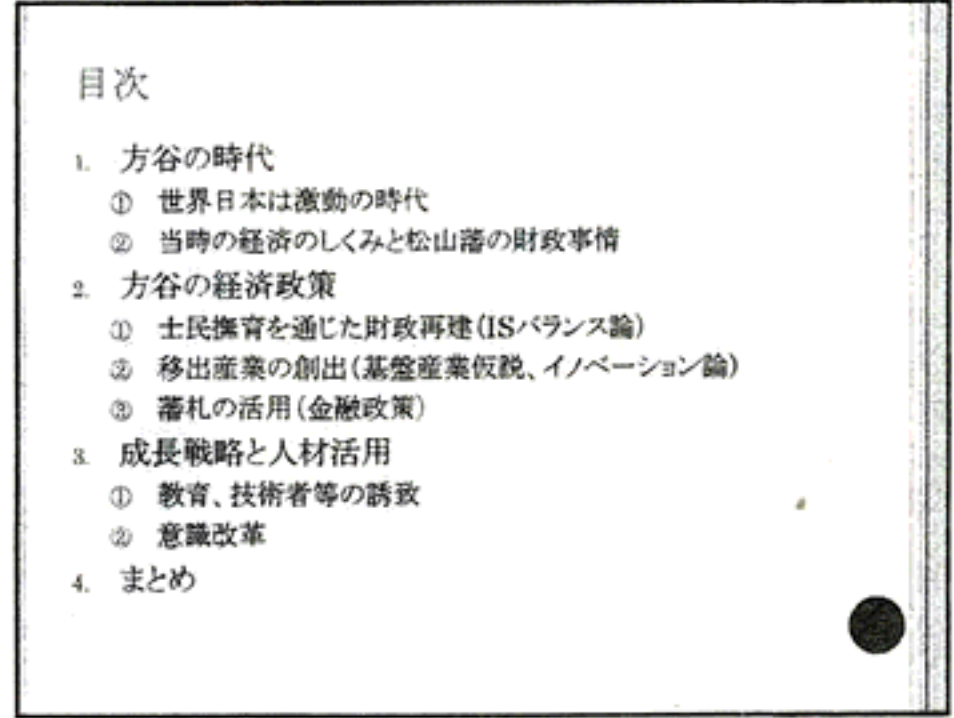
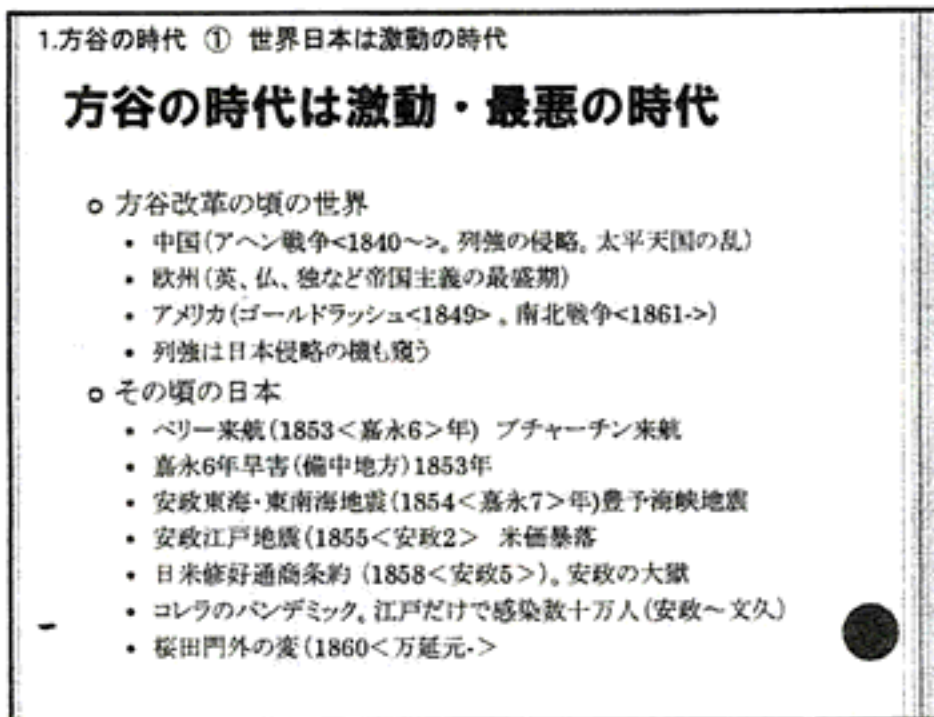


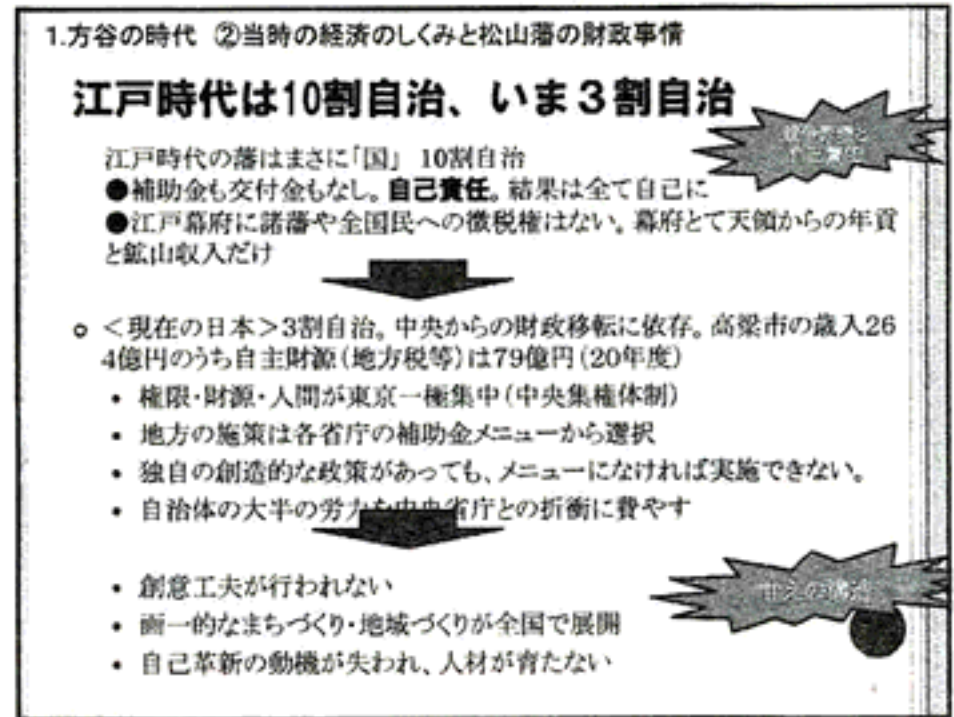
1



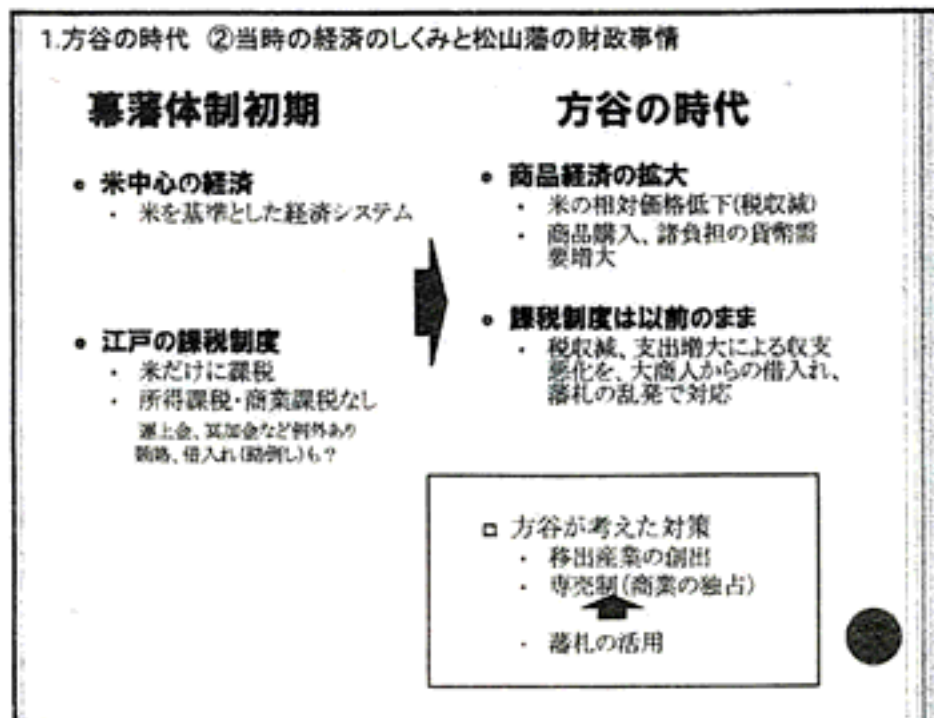
2



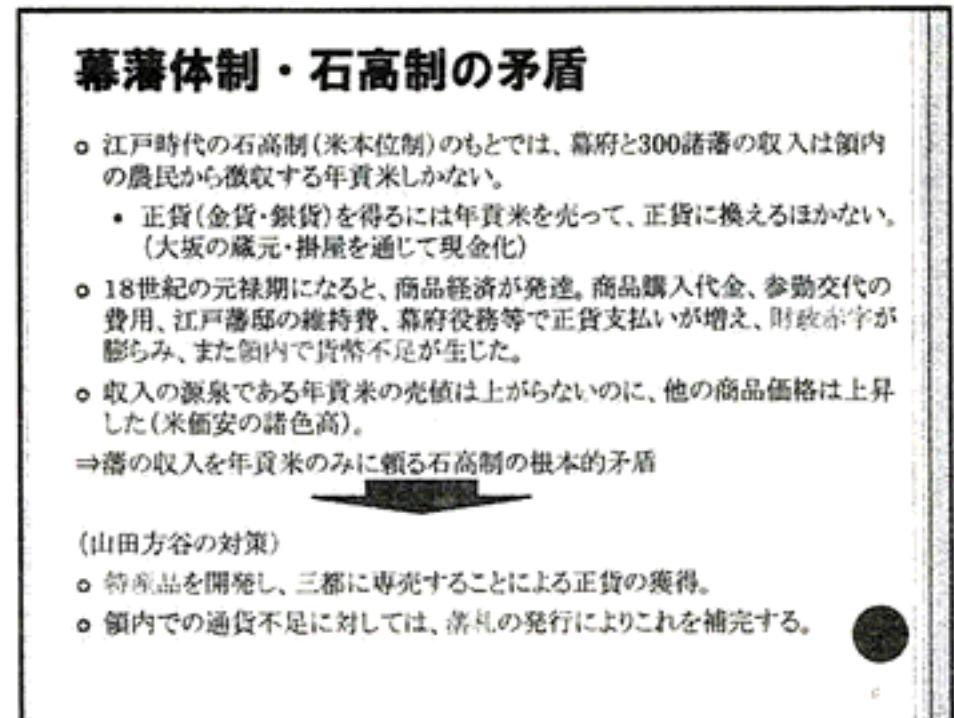
3



4



5



6



1. 方谷の時代 ② 当時の経済のしくみと松山藩の財政事情

### 当時の松山藩の財政状況

- 5万石の石高とはいいながら、実収は19,300石
- そこから藩士と領民への支給米(給料分)を支出すると13,000石(=19,000両)。
- さらに国元、三都3カ所の出先費用19,000両を支出すると差し引きゼロに。
- 累積債務残高は10万両あり、その利払いが9,000両あるので、その分だけ毎年赤字が膨らむ-----という調査結果

↓

- にもかかわらず過去の財政担当者は、財政の現実を把握せず、大坂や藩内の豪商等からの返済の当てのない借入金を繰り返し、目先を弥縫することに終始。
- さらに藩札の乱発やその準備金の流用、藩士からの借上米、農民への高掛米などの安易な課税強化に頼っていた。

7

2. 方谷の経済政策 ① 士民撫育を通じた財政再建

### 基本哲学

**政治哲学**  
 ・「至誠惻怛(しせいそくだつ) 誠意を尽くし人を思いやる心  
 ・「士民撫育(しんみんぶいく) 領民を富ませることが国の豊かさ

**改革の基本理念**  
 ①「事の外に立ちて事の内に屈せず」  
 ③「義を明らかにして利を計らず」

**至誠惻怛  
士民撫育**

←

**役所の論理  
自己の榮達**

方谷の偉大さは、単に財政再建を成し遂げたのではなく、その成果を福祉増進(士民撫育)に活用した点、というよりむしろ地域を活性化させ、領民を豊かにすることによって財政改革を実現した点に見出される。

8

2. 方谷の経済政策 ① 士民撫育を通じた財政再建

### 「理財の外に立つ改革」

**「理財論」上**  
 今日、当藩の財務制度は、これまでにないほど緻密になっている。田地税、収入税、関税、市場税、通行税、資産税など、ありとあらゆる税金をとれるようになっていて、役人の給料や、接待交際費など藩の歳入は絞るところまで絞っている。こうした努力をもう数十年もやっている。それなのに、藩財政はますます困窮し、借金の山だ。なぜ、このような事態になったのか？税金の取り方が少ないのか？儉約の仕方が足りないのか？じつはどちらでもないのだ。それ替く天下の事を制する者は、事の外に立ちて事の内に屈せず。天下をよく治めるものは、物事を相対化し、広い見地から考えるものだ、役所の中の銭勘定だけ考えようとするからだめなのだ。

「企業の目的は、それぞれの企業の外にある。企業は社会の機関であり、目的は社会にある。したがって、事業の目的として有効な定義は一つしかない。「顧客の創造」がそれだ。」

P. D. ドラッカー

世に求めて見れば天下に求む 天下に求めて見れば吾人に求むよ

9

2. 方谷の経済政策 ① 士民撫育を通じた財政再建

### 「理財」はもともと経済と同義

Political Economy → Economy

- 経済・・・「経世済民」世を経(おさ)め民を濟う
  - ・ 経世・・・乱れた世を整える。
  - ・ 済民・・・苦しんでいる民を救う
- 理財・・・『易経』の「財を理(おさ)める」から。
- 資生・・・『易経』「至れる哉坤元、万物資りて生ず」

山田方谷の「理財論」の「理財」は、今日の語感である役所の財務ではなく、国全体を良くしていく方策を意味したもの

「経済は人材を育養し、物産を取り立つるに在り」  
嘉永2年(1849) 板倉静の諮問に対する答申(秋月風水「観光集」)

10

2. 方谷の経済政策 ① 士民撫育を通じた財政再建

### 財政と領民福祉は車の両輪

- 「御勝手(財政) 御取直と申儀は、金銭取扱斗にて決して成就仕ものに無之、御国政の本相立、町在中取治め方迄相整候上ならでは御立直に至申間敷候、御政事と御勝手は車の両輪にて持合の者に御候間、.....」

～嘉永4(1851)年4月8日 藩主に対し建白「存寄申上候覚」

↓

- ・ 財政の立て直しは、決して収支を合わすだけでは成就できない。領国のなりわいと領民の生活がよく整わないなら、立て直したとはいわない。「士民撫育」と「藩財政」は車の両輪なので、片方だけがよくなるということはありません。

11

2. 方谷の経済政策 ① 士民撫育を通じた財政再建

### 貯蓄投資バランスからみた方谷の改革

#### 御政事と御勝手は車の両輪

事の内 利をはかる  
**御勝手**

事の外 義を明らかにする  
**御政事**

財政赤字は

収入-財政支出  
(財政バランス)

=

少なすぎる投資

投資-貯蓄  
(投資貯蓄バランス)

投資を増やす

+

少なすぎる移輸出

移出-移入  
(域際収支)

移輸出を増やす

↑

これを改善するには  
増税か、輸出削減か？

↑

企業誘致・投資促進  
PPP、PFIの推進  
地域金融機能の強化

↑

ものづくりの再生  
地域ブランド確立  
観光振興

12



2. 方谷の経済政策 ③ 藩札の活用

### 財政改革の核心は「税源涵養」

結果	高橋侯
① 産業振興	新しい時代の潮流に乗った産業政策 - 新田の開墾 - 物産品の改良 - 藩の専売特許(専売事業の活用) - 船政の近代化
② 税源涵養	藩政の刷新と増収 - 大高橋への借金返済 - 大高橋の増収
③ 藩札発行	信用の回復 - 藩札の発行
④ 土下野合	藩士への教育 - 藩士の教育 - 藩士の教育
⑤ 近代化の推進	近代化の推進 - 近代化の推進 - 近代化の推進
⑥ 財政改革	財政改革 - 財政改革 - 財政改革
⑦ 産業振興	産業振興 - 産業振興 - 産業振興

山田方谷の7大改革

財政改革の核心は「税源涵養」

山田方谷の改革

山田方谷の改革

13

2. 方谷の経済政策 ② 移出産業の創出

### 鉄事業

- 耕地の少ない松山藩の資源の中で、方谷が着目したのは高梁川上流で採れる良質の砂鉄であった。
- 方谷は、三室・吉田(新見市神郷)などの鉄山を開掘して藩の直営事業とするとともに、北方・吹屋の両銅山を買収した。
- 高梁川右岸の近似に3万両の巨費を投じて「数十棟」もの鉄工所を建設した。
- そこで鉄工二次製品である鉄器、鋸、刃物、日本刀、釘、かすがい、備中鉄、稲こぎ等の農機具を大量に生産した。
- 中でも三本歯の備中鉄は名品として全国に普及した。また鉄釘は大火の多い江戸の町で高値で売れたという。
- 会津藩士秋月梯次郎の松山藩視察記によれば、「松山藩の北方山中、松山川の上流には鉄を産し、当時釘等を造り江戸へ廻運転売して利益があり、一カ年三千両程になる。この地での産物で名のあつたのはこの一品である。」

14

2. 方谷の経済政策 ② 移出産業の創出

### 地域のブランド化 備中鉄、備中きざみ

- 領内で取れる砂鉄から備中鉄を生産させ、またタバコや茶・和紙・油餅子などの特産品を開発、「撫育局」を設置して専売制を導入した。
- 他藩の専売制とは逆に、生産に関しては生産者の利益が重視(土民撫育)されて、藩は後述の流通上の工夫によって利益が上がるようにした。
- 特産品の販路は、商人の力が強くなりすぎて中間手数料がかかる大坂を避け、藩所有の艦船(蒸気船「快風丸」)で直接江戸市場へ運び、藩邸内の施設内で江戸や関東近辺(鉄は農村の需要が高かった)の商人に直接販売した。これによって、中間利益を排して高い収益性を確保する一方で、藩士たちに航海術を学ばせた。

15

2. 方谷の経済政策 ② 移出産業の創出

### ブランド化の推進と地域商社「撫育方」の設立

- 藩内の商工業者に対しては煙草、茶、檀紙、和紙、菓子(ゆべし)などの備中ブランドの開発・生産を奨励。とくに煙草は「備中剣」として名声をる。
  - ・ 町家、武家屋敷でも剣煙草を作り家計の助けにするものが多かった。
- 嘉永5(1852)年、鉄製品と上記産品一切の販売管理を担う総合商社「撫育方」を設置し専売制を導入した。
  - ・ 他藩の専売制は、商工業への課税の代替として実施。方谷の撫育方は生産者の利益を重視(土民撫育)、藩は流通上の工夫によって利益があがった。

備中鉄

いなこぎ

16

2. 方谷の経済政策 ② 移出産業の創出

### 江戸産物廻し

- 嘉永5(1852)年、鉄製品を含む収納米以外のこれら産品一切の販売管理を担う総合商社的な機能をもつ役所を設置し、土民撫育の理念から「撫育方」と名付けた。
- 販路はそれまでの大坂から大消費地の江戸に転換、「快風丸」という洋式船を建造し物資輸送を行った。そのため道路や河川改修なども実施した。
- 輸送された産物は木挽町屋敷の河岸に「江戸産物方」と倉庫を設けて、江戸市場への販売が行われた。
- 撫育方では交易で得られた正貨を準備として、金札である「永銭」を発行し、これを領民に貸し付けて、事業拡大を促進する金融機能も果たした。
- こうした「江戸産物廻し」による利益金は3年目には1万両を超え、4年目には5万両に達したといわれ、江戸藩邸の公費に充たされた残りの利益金は、大坂の負債返却や永銭札発行の準備に充てられた。

17

2. 方谷の経済政策 ② 移出産業の創出

### 専売制の目的は「雇用」「外貨獲得」②

万延元年11月「産物存寄書」

- 「産物江戸廻し相始候根本の主意は、毎々御尊申候通、下方撫育の爲にて、民の産を制し國中遊民無之様に致度、且又御城下の儀は山中の事故、売買交易の外諸職人多分無之ては繁榮不致に付、産物製造仕出し他方の金額取入候事第一の儀と存付候処より、反物・釘等の製作相始め江戸廻し相試候処、追々広まり候に付・・・」
- 江戸産物廻しを始めたのは、何度も言うように、領民の福祉のためで、産業を興して失業をなくするためである。当地は山間地なので、(沿岸諸藩のように水田開発ができないので)、職人を増やして城外への移出を増やすほかは繁榮の道はない。産物を作って移出し、城外から貨幣を取り込むことが何より大事であるから、反物、釘などを作って江戸の市場に出したら、だんだん売れるようになった……


18



2. 方谷の経済政策 ③ 藩札の活用

### 藩札とは何か？

- 「幕府の許可をもらって藩政府が発行した領内でのみ通用するペーパーマネー」
  - ・平均的に準備となった**正貨の3倍**の発行額
  - ・通用期間は15～25年  
～鹿野嘉昭「藩札の経済学」(2011)
- 90年代まで「藩札＝悪」論が主流だった。
- 藩札を発行する理由
  - ・藩財政収入の**不足を補填**するため
  - ・藩経済の**成長通貨**を供給するため
  - ・藩内産業の**前買し資金**を調達するため
  - ・藩士・領民救済のための**貸付原資**をつくるため
  - ・領民に貸付け利息を得て**収入を得る**ため



松山藩の藩札

19

2. 方谷の経済政策 ③ 藩札の活用

### 方谷は「反藩札」論者ではなかった

～山田方谷の漢詩

「楮銭は買なけれども亦能く飛ぶ  
飛走輕便は人の帰るところなり  
季世時を濟うは唯此の物のみ  
唐家の貨政未だ全くは非ならず」

紙幣はただの紙なのに、よく流通する。唐の飛走を效うには、この紙幣の特質を巧みに駆使する以外に方法はなかった。唐代の通貨政策は全てが間違っていたわけではない。

↑↓

～J・シュンペーターの信用創造論

「馬に対する請求権の上において  
駈けることはできないが、貨幣に  
対する請求権でものを購入する  
ことができる。」経済発展の理論3章

馬そのものとの請求権は異なる。銀行は貸出を増やしても、現金は減らさない。この信用創造機能はインフレーションを引き起こす手となる。

20

2. 方谷の経済政策 ③ 藩札の活用

### 藩札の利害得失を熟知していた方谷

『我藩財政につき、過半の力を藩札の運用に用いたり』

「銀札両替は、(中略)所置悪しければ札潰れに及ぶ。不容易不面目なるのみならず、君公の御首尾にも拘わり候事故、財政に関わる人の尤も恐るる如也」 ～国分胤之 『昔夢一斑』

正貨流入の手立てを講ぜず、安易な財政ファイナンスに陥ると、札割れ、超インフレとなり惨禍が起きる。

『理財の第一は交鈔(こうしょう; 紙幣)の術なり』  
『会鈔の財政質実の如し』

方谷は安政4年、中国の千年以上にわたる紙幣発行の利害得失を論じた詩をつくり、後世の為政者に残した。  
詳しくは三宅康久「山田方谷の通貨政策」『現代に生かす山田方谷の思想』pp.69-74を参照されたい。

21

3. 成長戦略と人材活用

### 方谷の改革とアベノミクス

いずれも国民の福祉増進＝「土民撫育」が目的。

1. 成長戦略(流れを変える)
2. 安定化政策(波を埋める)
3. 所得再配分政策(凸凹をならす)

22

3. 成長戦略と人材活用

### 人材育成

- 藩校有終館、私塾牛籠舎で改革実践の担い手となる門弟を育成。
- 野山地区(現、上房郡賀陽町宮地付近)に「学問所」を設けたほか、鍛冶町、八田部地区、玉島地区に「教諭所」を設置した。この他、家塾13ヵ所、寺子屋62ヵ所を開講
- 武家でない進鴻溪、三島中洲、林富太郎等の人材を育成、藩政に活用。
- 明治維新後、大久保利通等からの異例の新政府入閣を断って、備前岡山藩の藩校である関谷学校を再建すると同時に、明親館、温知館など岡山各地で子弟教育も行った。

23

3. 成長戦略と人材活用

### 積極的に進めた人材の誘致

- (農機具や鉄器など鉄工業を興すため)冶工を、出雲・伯耆及び諸国から集めるという積極政策を展開し、これに応じて多くの者がやってきた。『岡山県史 近世IV』
- 「(略)他国人で寄住する者の内より選んで富裕な百姓に預け、農業をさせて妻を迎えさせ、永住させた。1853(嘉永6)年のペリー来航後、他領の海岸の住人で恐怖を逃れて松山藩領に来た者を、取り立てて土着させ、山間の地を開墾させた」(『観光集』)。
- 「村方人別年々相増、新田地段々相開け、惣て田地直(値)段大に高直(値)に相成候」(『山田方谷全集』第二冊)

24





## 山田方谷の藩政改革と産業振興

～事の外に立ちて事の内に屈せず～

大崎 泰正

財団法人岡山経済研究所 常務理事

### 備中松山藩の藩政改革

岡山県の西部を南北に流れる一級河川・高梁川。その中流域に位置する人口3万5千人の<sup>なかはし</sup>高梁市は、かつて備中松山藩5万石の城下町として栄えていた。幕末に藩主の座にあったのは板倉勝静（1823～1889）で、徳川幕府最後の老中でもあった。

高梁川左岸の扇状地に拓けた現市街地には、今なお武家屋敷や古い商家など往時の面影が残り、山田洋次監督の「寅さん」シリーズをはじめ数々の映画ロケ地としても知られている。

一方、反対の右岸は吉備高原に連なる丘陵が河岸まで迫る中、帯状の狭い平地が続いている。そこに<sup>ちかのり</sup>近似という小集落が静かに佇んでいる。

実は、江戸末期のこの地区には「数十棟」もの鉄工所が建ち並んでいたという驚くべき記録がある。

備中松山藩の財政と民生を立て直すため、3万両

の巨費を投じて、この一大殖産事業を敢行したのは農民出身の元締役（他藩の勘定奉行に相当）山田方<sup>ほう</sup>谷<sup>く</sup>（1805～1877）である。

近似地区の「鍛冶屋町」というバス停名に僅かにその名残をとどめているが、今や往時の形跡は歴史の彼方に消え去っている。

幕末期に10万両（現在の貨幣価値で200億円とも600億円ともいわれる）の借財を抱え、破綻寸前であった備中松山藩の財政を、わずか8年で劇的に立て直した方谷の藩政改革は、近年、国と地方の財政問題が深刻化する中で、全国的にも注目されるようになってきた。

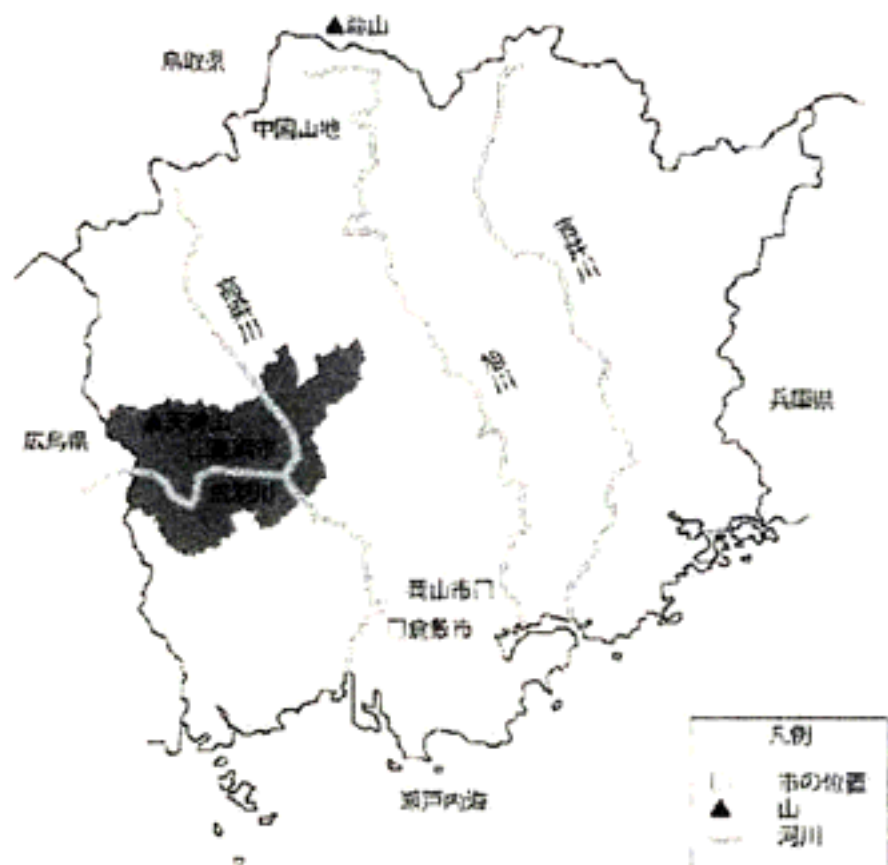
だが方谷の本当の偉大さは、単なる財政再建ではなく、その成果を「学問所」「教諭所」の設置、道路、水路など産業基盤の整備、洋式兵制の採用や農兵制の創設、早魃や凶作に備えた44カ所もの「貯倉」の設置といった数々の福祉政策（士民撫育）に活用した点にある。というよりはむしろ地域経済を活性化させ、領民を豊かにすることによって財政改革を実現したといえるのである。

「備中聖人」とも称された儒学者であり、かつ卓越した実務家であり、優れた教育者でもあった方谷の全体像を論じることは、もとより筆者の能力を超えている。ここでは産業振興と財政運営の面から、その現代に通じる意義を考えてみたい。

### 元締役・山田方谷

山田方谷は、菜種油の製造販売を家業とする農商の子として文化2（1805）年に生まれた。早く両親を亡くし苦学しながら学徳を積み、これが藩主勝<sup>かつね</sup>戦の目に止まって士分に取り立てられた。京都、江戸

図1 高梁市の位置





#### 【大崎泰正氏のプロフィール】

岡山県倉敷市生まれ。1973年岡山大学法文学部経済学科卒業、同年株式会社中国銀行入行。総務部、調査企画部等を経て、財団法人岡山経済研究所出向。2005年理事所長。2008年常務理事（現在）。

主な著書『図説岡山経済～21世紀への新たな発展基盤を求めて』（1993年、山陽新聞社）、『挑戦する企業城下町—造船の岡山県玉野』（2001年、新評論）、『平成の大合併と地域社会の再編・活性化～岡山県の事例～』（2007年、明文書房）。以上いずれも共著。『勝央・新勝央中核工業団地開発事業誌』（2008年、地域振興整備公団）。



山田方谷画像

所蔵：高梁方谷会

へ遊学の後、天保7（1836）年、32歳のとき帰国し、藩校有終館の会頭を命じられた。有終館では、後に改革実践の担い手となる多くの人材を育てるとともに、世子勝静の教育係も勤めた。

藩政改革は、嘉永2（1849）年、襲封した勝静から強い要請を受け、元締役兼吟味役に任じられたときから始まる。

方谷は、急ぎ藩財政の実態を徹底的に調査した。その結果は5万石の石高とはいいながら実収は2万石に満たず、年間の収支赤字は3万3千両に及んでいること、さらに累積債務は藩の財政規模の約2倍の10万両にも達し、その利払いだけで約1万3千両に上るといふ驚愕すべき事実であった。

にもかかわらず過去の担当者は藩札の乱発やその準備金の流用、藩士からの借上米や農民への高掛米などの安易な課税強化、果ては大坂や藩内の豪商等からの返済の当てのない借入金を繰り返し、目先を

弥縫することに終始していたのである。

方谷は藩主の絶大な信認を背景に、「上下節約」「負債整理」「藩札刷新」「産業振興」「民生刷新」などの改革策を次々に断行していった。これらに一貫した精神は陽明学の中心的思想である「至誠惻怛」（誠意を尽くし人を思いやる）と「士民撫育」（領民を慈しみ育てる）の2つであった。

上下節約では、賄賂・接待の禁止、藩士の減俸なども含む徹底的な節約令を発令したが、実質的に中級以上の武士と豪農、豪商を対象とするものであった。方谷は自らの禄を中級武士並み以下に減額したうえ、家計出納を第三者に任せて硝子張りとした。藩主勝静も粗衣粗食を貫くことで節儉の範を示した。

#### 「理財論」

方谷の財政改革のエッセンスは江戸に遊学中の32歳前後に書いた「理財論」という論文に集約されている。

「今日の藩財政の仕組みは、これまでにないほど綿密になっている。あらゆる税制度を設け、役人の給与や諸経費は絞れるだけ絞っている。にも関わらず、財政はますます窮乏しているのはなぜか。徴税制度の緻密さが足りないのか、節約の仕方が不十分なのか。実はどちらでもないのだ。

「それ善く天下の事を制する者は、事の外に立ちて事の内に屈せず」

国を正しく導く為政者は、大局的見地から判断、行動し、小さな局面での理屈にはこだわらないものだ。今の理財者が失敗を重ねているのは、全て目先



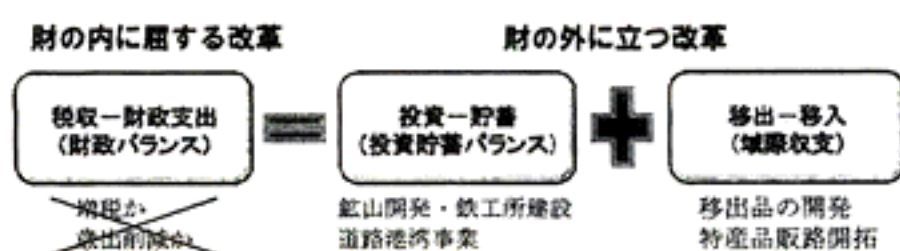
の利に囚われて大局観を失っているからだ。」

(『理財論 上』意識)

つまり、財政の窮乏という問題の局面にだけとられず、国政の根本を立て直し、領民を豊かにすることによって活力ある社会をつくることこそが改革だというのである。

やや牽強附会かもしれないが、筆者は方谷の「事の外に立つ改革」は、マクロ経済の「貯蓄・投資バランス」の恒等式を想起すれば理解しやすいと考えている。

周知のように、一地域（国）の財政収支は、次式のように民間の貯蓄投資差額と域際（国際）収支の和に等しいという関係が常に成立している。



財政再建の方策は、ともすれば「増税か、歳出削減か」という、左辺の中だけの議論に陥りがちだが、これは「財政という枠の中」での話に過ぎない。視点を右辺に転ずれば、投資や輸出の増加を図ることが、巡り巡って財政状況の改善につながるという関係がみえてくる。つまり民間経済の活性化を図ることによって、財政再建は自ずと達成できるのである。方谷の財政改革はまさにそのような内容、すなわち「財政の外側」からの改革であった。

## 鉄山の開掘と負債整理

耕地の少ない松山藩の資源の中で、方谷が着目したのは高梁川上流で採れる良質の砂鉄であった。方谷は、三室・吉田（新見市神郷）などの鉄山を開掘して藩の直営事業とするとともに、北方・吹屋の両銅山を買収した。

さらに方谷は、生産された鉄や銅に付加価値をつけるため、農機具や鉄器など市場性のある二次製品を開発し、大消費地で販売することを企画した。

こうした事業を立ち上げるには莫大な初期投資が必要であるが、矢吹久次郎など庄屋、有力鉄山経営者等を説得し、彼らの支援を得ることができた。しかし10万両に及ぶ累積債務の利払い負担があると、事業資金は到底捻出できない。

方谷は、全てを情報公開して債権棚上げの理解を得ること以外にはないと考えた。譜代の重臣たちは猛反対したが「大信を守らんと欲せば、小信を守るに違なし」と振り切り、自ら大坂に乗り込んだ。

豪商加島屋をはじめとする債権者を一堂に集めた席で、方谷はそれまでの粉飾を含む藩財政の実態を洗いざらい打ち明け、その上で再建構想の詳細と新規事業からの収益による返済計画を説明し、その前提条件として返済繰延を強く要請した。

交渉は難航を極めたが、最後は方谷の情理を尽くした説明は商人達の受け入れるところとなり、10年～50年の元利金返済猶予を取り付けることができた。

実際には、直営事業の成功により、この数年後には殆ど完済することになるのである。

## 藩札刷新

負債整理と並んで、もう一つ大きな問題は、天保年間間の藩札の大量発行や贖札の流通などで殆ど紙くず同然となっていた藩札の信用回復であった。

方谷は、嘉永3（1850）年から3年かけて、信用の低下した五匁札を正価で買い取り、同5年9月、群衆が見守る河川敷で、未使用分を含め711貫300匁にも及ぶ大量の藩札を焼き捨てた。藩札の信用回復への並々ならぬ決意を示すパフォーマンスであった。

そして準備金の裏付けがある新たな藩札を発行し





たが、この「永銭」と呼ばれた新藩札は、極めて高い信用を得て、他藩の領内にまで流通するようになった。

後年、方谷は『我藩財政につき、過半の力を藩札の運用に用いたり』と述懐している。

### 特産品開発とブランド化

方谷は、冒頭の近似村に鍛戸（鉄工所）を次々と建設し、鎌、鋏、釘、かすがい、稲こぎ機などの製品を開発・生産した。中でも荒れ地の耕作に適した三本刃の「備中鋏」は、当時全国で大ヒットし、釘も火事の多かった江戸で飛ぶように売れたという。

これら鉄製品の製造に必要な多くの冶工は、出雲・伯耆をはじめ諸国から積極的に呼び寄せた。方谷は、弘化4（1847）年、1か月余り洋学の先進地であった津山藩に自ら遊学し、砲術と銃陣を学んだ。帰国後、直ちに大砲2門を鑄造し、安政4年の項には数十門を鑄造したとあるから、鉄工技術の水準も当時すでに相当のレベルに達していたことがわかる。

また藩内の商工業者に対しては煙草、茶、檀紙、和紙、菓子（柚餅子）などの備中ブランドの開発・生産を奨励した。とくに煙草は「備中刻」として名声を得て、町家だけでなく武家屋敷でも刻煙草を作り家計の助けにするものが多かったという。

方谷は、嘉永5（1852）年、鉄製品を含むこれら産品一切の販売管理を担う総合商社的な機能をもつ役所を設置し、士民撫育の理念から「撫育方」と名付けた。撫育方では藩財政に余裕があるときは永銭札を領民に貸し付け、事業拡大を促進する金融機能も果たした。

産品の販路は、商人の力が強く不利な取引を強いられる大坂よりも、大消費地の江戸を選び、洋式船

を購入して玉島港より直送した。江戸には、江戸産物方を設置し、木挽町屋敷の河岸に倉庫を設けて、貨物を処理した。

こうした「江戸産物廻し」による利益金は3年目には1万両を超え、4年目には5万両に達したといわれ、江戸藩邸の公費に充当された残りの利益金は、大坂の負債返却や永銭札発行の準備に充てられた。

さらに販売先を大坂から江戸に変更したことは、当時、外国貿易の開始によって金銀比価が金有利に大きく変動する中で、金貨建ての江戸の売上代金で大坂の銀貨建ての債務を返済することによる為替差益を生み、債務減少に大きく寄与したと考えられている。

なお余談ながら、方谷が設立した撫育方の剰余金は、明治に入って高梁を本店とする第八十六国立銀行（現中国銀行の淵源）が設立されるときに出資金として拠出され<sup>1</sup>、金融を通じて地域産業の近代化に活用されることとなった。

### 事の外に立つ改革

方谷が財政改革に直接従事したのは、嘉永2年に元締役に就任してから、安政4年に辞任するまでの僅か8年に過ぎない。その間に10万両の負債をほぼ完済し、さらに、後には10万両の剰余金を残した（10万両の剰余金を実現した時期は安政4年の元締役辞任より後とする説が有力である）。

こうした劇的な財政再建には、この間の物価高騰や金銀比価の変動が有利に作用したことは間違いないであろう。しかし、それも産物の交易があつての話であり、やはり産業振興を通じて技術が蓄積され、人材が育ち、地域に活力が生まれたことの成果だといえよう。

<sup>1</sup> 国分胤之「昔夢一斑」



---

「江戸産物廻し」を始めた契機について方谷は「『下方撫育』を図り、『国中遊民（失業者）之なき様に致』すには、当藩は『山中のことゆえ、売買交易の外』繁栄の方途はなく、領内の産物を輸出して正金銀を獲得することが不可欠」と現代にも通じる地域振興の要諦を述べている<sup>2</sup>。

幕末期には、自給自足を基本とする農本主義経済は、商品経済の拡大によって既に立ち行かなくなっていた。早くからそれを見抜いていた方谷は、殖産興業とイノベーションによって流れを変えたのである。

方谷が藩政改革に奔走した、この期間の日本は、

ペリー来航で内政・外交とも極度に不安定化し、安政東南海・南海地震、米価暴落（安政2年）、などの災禍が続発するなど最悪の時代であった。

「事の外に立って」大きな流れを変革していかなければならないのは、当時も今も同じである。

#### 参考文献

山田準編「山田方谷全集」、岡山県史、「高梁市史」、矢吹邦彦「ケインズに先駆けた日本人」、山田方谷研究会編「山田方谷の研究」、太田健一「山田方谷のメッセージ」、樋口公啓「山田方谷の思想と藩政改革」

---

<sup>2</sup> 万延元年11月「産物存寄書」